【基調講演】

ヨーロッパにおける日本関係コレクション

――美術・工芸から民具へ――

ヨーゼフ・クライナー

特定の一つの文化を対象とする学問研究―例えば、日本学、中国学、インド学等―は、その学問分野の設立以来、文献学的研究を主流としてきたが、20 世紀後半に二つの重大な意味を持つパラダイムの変化が起こった。日本学では、まず、現在の日本人の社会、歴史、文化を、社会科学的・民俗ないし民族学的な立場から取り上げるアプローチが注目を集めるようになった。そして、最近に至る 20 年ほどの間に、従来の、文字で書かれた資料と並んで、絵画等に描かれたものも研究の視野に入れるビジュアル・アプローチが現れた。渋沢敬三はこのアプローチを既に 20 年ないし 30 年も先駆けて見通していた。その結実が、1964–1968 年の編著『絵巻物による日本常民生活絵引』（全 5 巻及び総索引、角川書店）である。それに加えて、もう一つの大切な研究資料がある。すなわち、「モノ」である。絵画で読み取れる文化だけではなく、モノ自体が文化として語られる物質文化研究の意義は大きい。日本学、日本研究の分野において、1990 年代にアメリカのスタンフォード大学が先頭を切って、仏教研究でのお経の教えと並行して、モノとしての仏像や法具の研究を取り上げた。また、ウィーン大学日本学研究所は、国立民族学博物館と連携して 1970 年代に農機具の研究に着手した。言うまでもなく、このアプローチでのモノの収集、また、その整理、分析、展示を行っている博物館や、そこに保管されているコレクションは大きな役割を果たしている。このフィールドにおいても、渋沢敬三は日本で大きな業績を残している。

ヨーロッパにおける日本のモノの収集は、ヨーロッパと日本との二つの文化が最初に接触した 16 世紀までさかのぼる。最初は、美術・工芸品が支配者、資本家の骨董陳列室や宮殿、館に収められ、ステータスシンボルとして高く評価された。その後、それが近世後半に公の博物館に発展したのである。なかには、日本の日常生活で使われる道具（民具）も含まれた。ヨーロッパ人には、そういったコレクションを通じて「日本」という国や、その文化を理解しよう、あるいは理解を得ようという意図があった。また、屏風、着物、漆、焼き物のように、それ自体の美しさや便利さという点でもヨーロッパの生活文化に取り入れられ、すっかりヨーロッパに定着したものもあった。

さらに 18 世紀末には、フランスからヨーロッパに広まった啓蒙主義、特に百科全書主義の影響で、日本人とその文化を総合的、立体的に把握するために、あらゆる側面から各分野にわたる大々的なコレクション―それには民俗レベルの常民文化も含まれるが―の収集に力が注がれるようになった。出島のオランダ商館長として活躍した Isaak Titsingh I. ティーツンク、Jan Cock Blomhoff J.C. ブロムホフをはじめ、文政年間と寛政年間に二度も日本でコレクションの収集を行った Philipp Franz von Siebold Ph.Fr. フォン・シーボルトが代表的な業績を残している。

明治時代に入って、Heinrich (Henry) von Siebold H. フォン・シーボルト（小シーボルト）と、その競争相手となった Edward Sylvester Morse E.S. モースが、膨大なコレクションを収集した。この二人のコレクションほど体系的に揃えられたものは 20 世紀には他にない。

その後は、主に日本の美術・工芸が注目されるようになり、収集され、海外に流出した。そして、こ

れらが西洋美術に影響を与えたことはよく知られている。一方、あまり目立たず、限られた分野だけの収集であっても、よく揃っているいくつかのコレクションもある。そのなかからいくつかを例として挙げると、ベルリン、ライデン、オスロ、ウィーンなどに保管されている西南諸島の物質文化の重要なコレクションがある。また、ケルン、コペンハーゲン、サンクトペテルブルクなどにあるアイヌ文化のコレクションもある。もっと狭い分野のコレクションを例に挙げると、パリ、ジュネーブ、チューリッヒにあるお札(ふだ)のコレクション、ウィーンの農機具のコレクションがある。

発表では、まず、日本研究にみられるパラダイムとその変化に触れ、次に主にヨーロッパにおける日本コレクションの歴史や現状、最後に、それらを通じて見られる西洋の日本観に集中して触れることにする。

（編註：本文は本報告書掲載にあたり、編集により発表要旨を一部改編したものである。）